



校長室だより

校長 山崎 聡子

生かされている命・ミッション

9歳で目が見えなくなり、18歳で耳が完全に聞こえなくなったという、東京大学特任教授の福島 智さん。先日、「課外授業 ようこそ先輩」というNHKの番組で福島 智さんが取り上げられ、母校に戻り、子供たちと向き合う授業の様子が放送されていて、大変考えさせられました。

まず、自己紹介からということで、出席番号1番の子供が指名されます。「あなたの名前を教えてください」と子供に問うことから始まりましたが、指名された子供は、どう伝えていいのか戸惑っていました。そこで、福島さんは、手を広げ、ひらがなを書くように促します。一文字一文字を指で手のひらに書き、名前が伝わり、福島さんに名前を呼んでもらい、子供は笑顔になりました。福島さんとその子供とが繋がった瞬間でした。

学校の後輩である子供たちに、自分が明日から目も耳も聴こえなくなったら…一週間の日記を書くよう宿題を出します。子供たちは、「こんな世界に取り残されるのは嫌だ」「何日経ったかわからない」「自分が一人なのかと思うと怖い」「なぜ自分がこんなことになるのか」等、一人一人が想像して考えたことをみんなの前で発表するという流れでした。福島さんは、一人一人の考えを受け止めた後、御自身の体験を語られました。何がしんどくて辛かったか……。それは、会話ができなくなってしまったことであり、宇宙空間の中に一人であるようであり、つまりそれは存在しないことと同じであるから辛かったと話されていました。人と人がつながることが

できるコミュニケーションをとることは、生きることなのだと話されていました。

コミュニケーションのとり方は、指点字（福島さんの指の上で点字の組み合わせをして指にタッチしていく）を使うとのことで、子供たちも体験をし、指点字は相手の指に直接タッチしていくため、温かさを感じられるからいいと、ある子供が話していました。

当たり前にも何でも見ることができるとあり、何でも聞くことができる耳があり、人と対話できる口がある私たちは、それを大切に使っているかと考えさせられます。福島さんが大学進学を考えた時に、先の不安を高校3年生の時の先生に相談した際、「先のことは誰にもわからない。やりたいことをやってみればいい。まずは、一歩踏み出すこと。歩きながら考えればいい。もし上手くいかなければ、その時に考えればいい。」と言われ、前向きにチャレンジしようと考えたとのこと。真剣に向き合って言葉を発することの大切さを改めて考えさせられます。特に、教師の言葉は子供たちにとって大きなものであるということに自覚し、良い言葉をたくさんかけることに努めていきたいと思っています。

子供たちの最後の質問で、人生の中で一番よかったことは何かという問いに対して、福島さんは答えます。「それは、生きていることです。生きていることは奇跡です。」と。さらに、自分と同じような人達が世の中にはたくさんいて、そういう人達のために何かをするミッションが自分に与えられているのだと話されていました。

生かされている命に感謝し、自分のミッションを問い続けていきたいと思っています。